はしど

練馬区立橋戸小学校
学校だより　第７号
令和元年１０月３１日
校　長　青木　俊哉
http://www.hashido-e.nerima-tky.ed.jp/

☆学校教育目標　考える子・思いやりのある子・たくましい子

本を手にしてみませんか

校　長　青　木　俊　哉

先月、６年の社会科見学で、国会や最高裁判所に出かけました。今年は、目的地が近くにまとまっていたこともあり、公共交通機関（西武池袋線～地下鉄有楽町線）を利用しての見学となりました。行き帰りの車内を静かに過ごせるよう､担任は子供たちに本を持参してもよいことを伝えていました。通勤時間帯にも重なり、それなりに混雑した車内でしたが、用意した本を読みながら静かに過ごす子が多く、周囲の乗客に迷惑をかけることもなく行ってくることができました。読んでいる子供たちを見ると、持ちやすさもあってか、文庫本や新書・ノベルズなど小型サイズの本が多く、また中身には一人一人の個性が表れ､物語や小説､クイズやパズル的なもの､ミステリーや空想科学読み物など様々でした。中には結構厚い本を持ってきた子もおり驚きましたが、限られた車内での時間を、活字を追い、本と共に過ごす子供たちの姿に感心し、安心しました。

“若者の活字離れ”が叫ばれてから、かなりの時間が経過しています。当時の若者は、既に大人世代となり社会を支える側になりましたが、世の中全体に活字離れが広がりつつあるとしたら、それはある意味危機的な状況と言えるかもしれません。出版や報道業界だけでなく、社会全体で活字や書物の大切さを訴え、考えていく必要を感じています。

さて、前任校での３年間、３本の電車を乗り継ぎ、結構長い時間かけて通勤しておりました。同じ路線、ほぼ同じ時刻の車内の様子を毎日見ていたわけですが、**“思っていたよりも、本を手にする人が多い”**との印象をもった記憶があります。当時一緒に研究活動をしていた板橋区学校図書館研究部の先生方とは、そんな話題を共有し、区内の子供たちに、より本に親しみ、読む楽しさを味わわせるために学校は何ができるかを考えたものでした。**“どっこい、活字はまだまだ生きている”**こんな思いを胸に、子供たちを本好きにする、本と仲良くさせる、動画や写真と共存しつつ画面に負けない紙の魅力や活字のよさを感じさせるための手だてを考え、実践していきたいと思っているところです。

改めて本校の読書活動の取組を振り返りますと、今年度は、１学期６月を読書月間、２学期は先月下旬を読書旬間とし、図書担当を中心に、児童の図書委員会の活動や集会、各担任による学級での指導を進めました。全教員による**「ブック･バイキング」**や**「おすすめ本の紹介コーナー」**など本校独自の取組により、子供たちがいろいろな本を手に取るようになったとの報告もあります。また、図書館開放スタッフや保護者ボランティアの皆様のご協力、図書館管理員の配置もあり、子供たちにとって学校図書館が身近な場所になっているようにも感じます。特別な取組やイベントだけではなく、日常的な活動への支えがあってこそ…と感謝しております。さらにボランティアの輪が広がるよう、今後もご協力をお願いできると助かります。

子供に**“もっと本を読んでほしい”**と願うなら、まずは大人から…。秋の夜長はこれからが本番です。保護者の皆様にも、ぜひ活字に触れ、本に親しむ、そんな時間をもっていただければ幸いです。